

ダニエル書 - 第二百一十一号

終末のしるしを解き明かす：春に芽吹く木々を指し示すキリストの示唆を理解する

Jeff Pippenger

2024-03-07

キリストは、終わりの時の「しるし」とその「しるし」が意味することを彼らが理解できるように、春に芽吹く木々を御自分の民に指し示された。

キリストは、ご自身の来臨のしるしを見張り、やがて来られる王のしるしを目にしたなら喜ぶようにと、その民にお命じになっていた。「これらのことが起こり始めるなら、見上げ、頭を上げなさい。あなたがたの贖いが近づいたからである。」また、春に芽吹く木々を指し示して言われた。「それらが今や芽を吹き出すとき、あなたがたは自分で見て、夏がもう間近にあることを知る。同じように、これらのことが起こるのを見たなら、神の国が近づいていることを知りなさい。」ルカ 21:28、30、31. 大いなる論争、308.

終末の「しるし」は、第一の天使の運動の到来を告げ、幕開けをもたらした「しるし」によって型どられていた。これらの「しるし」には天の震動が含まれていたが、ヨエルは、終末の「しるし」-イスラエルの不義を求めても見いだされず、神の聖なる山がとこしえに聖とされ、もはや異邦の者が再びそこを通り過ぎることのないその日々において、天の権勢の震動が地の権勢の震動も含むことを明らかにしている。ホワイト夫人は、天の権勢の震動と地の権勢の震動の違いを示している。

1848年12月16日、主は、天の力が揺り動かされる光景を私に見せてくださった。私は、主がマタイ、マルコ、ルカに記されたしるしについて語られる際、「天」と言われたときは天を、「地」と言われたときは地を意味しておられるのを見た。天の力とは太陽、月、星である。それらは天にあって支配している。地の力とは、地上で支配している者たちである。神の御声が響くとき、天の力は揺り動かされる。そのとき、太陽と月と星はその位置から動かされる。それらは消え去ることはないが、神の御声によって揺り動かされる。

「暗く重い雲が湧き上がり、互いにぶつかり合った。大気は裂けて後ろへ押しやられ、私たちはオリオン座にある開いた空間を通して見上げることができた。そこから神の御声が響いてきた。聖なる都はその開いた空間を通過して下って来る。私は、地上の諸権力が今揺り動かされており、出来事が順序正しく起こっているのを見た。戦争と戦争のうわさ、剣、飢饉、そして疫病が、まず地上の権力を揺り動かす。その後、神の力が太陽、月、星、そしてこの地球も揺り動かす。私は、ヨーロッパにおける諸権力の揺れ動きは、ある者たちが教えるような天の諸力の揺れ動きではなく、怒れる諸国民の揺れ動きであるのを見た。『初期の著作』 41。」

マタイ、マルコ、ルカにおける天の揺り動かしは、太陽、月、星に象徴される天を支配する諸力の揺り動かしを表している。こうした天の諸力はすべて揺り動かされ、「しるし」を生み出し、その「しるし」が第一の天使の運動の幕開けとなり、それを告げ知らせ

た。これらの天の諸力は、第三の天使の運動の間にも再び揺り動かされる。しかし第三の天使の運動においては、地の諸力もまた揺り動かされる。地の諸力とは、地を支配する力である。2001年9月11日には、天ではなく、地の諸力が揺り動かされた。

「いま、私がニューヨークは津波によって一掃されると宣言した、という話が出ていますか。私はそのようなことは一度も言っていません。そこに次々と階を重ねて建ち上がっていく巨大な建物を見ながら、私はこう言いました。『主が立ち上がり、この地を激しく揺り動かされる時、どれほど恐ろしい光景が起こることだろう！その時、黙示録18章1節から3節の言葉が成就するだろう。』黙示録第18章全体は、この地上に臨もうとしている事柄への警告です。しかし、ニューヨークに何が起ころうとしているかについて、私には特別な光は与えられていません。ただ、いつの日か、そこでそびえる大建造物が、神の力によってひっくり返され、打ち倒されることは知っています。私に与えられた光によって、私は世に破壊があることを知っています。主のひと言、全能の力のひと触れによって、これらの巨大な建造物は倒れるのです。私たちの想像を絶するほどの恐ろしい光景が起こるでしょう。」 Review and Herald、1906年7月5日。

ミラー派の歴史において、ルカが記録したしるしの一つは「諸国民の苦悩」であった。国々は地を支配する勢力を表しており、2001年9月11日、第三のわざわいが預言的歴史に到来したとき、地上のあらゆる国が揺り動かされた。その地上の揺れ動きはルカ21章に表されているが、「地の権力の揺れ動き」という聖書的表現によってではない。それは、ニューヨークの巨大な建物が倒されたとき世界の諸国にもたらされたものとして、「諸国民の苦悩」という語句によって表されていた。ルカにおける「諸国民の苦悩」は地の権力の揺れ動きを指しており、それはミラー派の歴史の中で成就した。

私は、地の勢力が今や揺り動かされており、出来事が順を追って起こっているのを見た。戦争と戦争のうわさ、剣、飢饉、疫病がまず地の勢力を揺り動かす、その後神の聲が太陽と月と星、そしてこの地もまた揺り動かす。私は、ヨーロッパの勢力の揺れは、ある者たちが教えるような天の諸力の揺れではなく、怒れる諸国民の揺れであるのを見た。『初期の著作』、41。

「怒れる諸国の権勢の揺り動かす」は、「地の権勢の揺り動かす」であり、これはアドベンチズム初期の歴史において「ヨーロッパの権勢の揺り動かす」によって例証されている。ユライア・スミスは1838年に、ヨーロッパの権勢を揺り動かしていたものが何であったかを特定した。

東方のキリスト教皇帝が自発的に権力をトルコ人の手に委ねたことによってこの〔第六〕のラッパの預言的期間が始まったのだから、その終結も、トルコの سلطان がその権力を再びキリスト教徒の手に自発的に返還することによって画されると正当に結論してよいだろう。1838年、トルコはエジプトとの戦争に入った。エジプト側はトルコの権勢を覆す見込みが十分にあった。これを防ぐために、欧州の四大国、イギリス、ロシア、オーストリア、プロイセンがトルコ政府を支えるべく干渉した。トルコはその干渉を受け入れた。ロンドンで会議が開かれ、エジプトのパシャであるメフメト・アリーに提示するための最後通牒が作成された。この最後通牒がメフメトの手に渡った時点で、オスマン帝国の運命が事実上、欧州のキリスト教列強の手に委ねられるこ

とになるのは明らかである。この最後通牒は1840年8月11日にメフメトの手に渡った！そしてまさにその日に、スルタンは四大国の大使に宛て、彼らの提示した条件にメフメトが応じない場合にはどうすべきかを問い合わせる書簡を送った。返答は、いかなる不測の事態が生じても心配する必要はない、というものであった。というのも、そのための手当ては彼らが講じていたからである。こうして預言的期間は終わり、そしてまさにその日に、イスラムの諸事の支配はキリスト教徒の手に移った。ちょうどそれより391年と15日前に、キリスト教の諸事の支配がイスラム教徒の手に渡ったのと同様であった。こうして第二の災いは終わり、第六のラッパはその響きを止めた。ユーライア・スミス『現在の真理概説』218頁。

第二の災いのイスラムは、その勢力の絶頂を過ぎていたが、神の言葉によればその勢力は三百九十一年十五日にわたって続くことになっていた。とはいえ1830年代には、エジプトはイスラム史上第二の大ジハードを継続する目的で、国内にカリフ制を再建しようとしていた。さらなるイスラムの戦争の可能性は、ヨーロッパ列強を恐れおののかせていた。数十年にわたり、イスラムがその戦争を再燃させるという危機は、当時の歴史家や記者によって「東方問題」と名づけられた。東方の民の戦いは何世紀にもわたり、宗教をローマ教会から受け継いだヨーロッパ諸国に対して遂行されてきた。1838年には、キリストが言及した「国々の苦難」は、イスラムが旧ローマ帝国に対してもたらした戦争によって生じた、怒れる諸国の震撼を表していた。

大いなるユーフラテス川に縛られている四人の天使を[解き放つ]ことによって、私は、神が今や、オスマン帝国を構成していた四つの主要民族で、これまでコンスタンティノープルにおいて東ローマ帝国を屈服させようとして空しく終わり、またヨーロッパ征服でもほとんど進展を見せなかったこれらの民族に、今度はコンスタンティノープルを奪取し、ヨーロッパの三分の一を蹂躪して服従させることを許そうとしておられたのだと理解する。これは十五世紀中頃の事実であった。ウィリアム・ミラー著作集第2巻、121頁。

ルカの記述に見られる諸国の苦難は、「困惑し、海と波が轟き」、また人々が「恐れあまり、そして地上に起ころうとしている事柄を見て気を失う」ことであった。東方問題のもたらした困惑は20世紀に至るまで地上の列強を動揺させ続け、その苦悩の象徴は「人々が恐れあまり気を失うこと」と「海と波が轟くこと」であった。

「神のしもべたちに施されるこの封印は、幻のうちにエゼキエルに示されたものと同じである。ヨハネもまた、このきわめて驚くべき啓示の目撃者であった。彼は、海と波がどよめき、人々の心が恐れあまり挫けるのを見た。彼は、地が動かされ、山々が海のただ中に移され（これは文字どおり起こっている）、その水がどよめき騒ぎ、そのうねりによって山々が震えるのを見た。彼には、災厄、疫病、飢饉、そして死が、その恐るべき使命を果たしているさまも示された。」『牧師たちへの証言』445頁。

ヨハネが十四万四千人への封印を示されたとき、彼は、海と波が荒れどよめき、人々が恐れあまり気絶するという形で表される諸国民の苦難を見た。これは、エゼキエルが第9章で示されたのと同じ封印であった。エゼキエルには封印の内的な要素が示され、ヨハネにはその封印に関連する外的な要素が示された。ヨハネは、諸国民の怒りが十四万四千人の封印と結びついており、またこの諸国民の怒りは、ルカが述べる「諸国民の苦難」

(歴史的には東方問題として同定される)でもあることを見た。さらに、第三のわざわいにおけるイスラムが、十四万四千人の封印の外的なしるしであることがヨハネに示された。

現在は、生きているすべての人々にとって、極めて大きな関心の的となっている時である。統治者や政治家、信任と権威の地位にある人々、そしてあらゆる階層の思索的な男女は、私たちの周囲で起こっている出来事に注視している。彼らは、諸国間に存在する緊迫し不安定な関係を見守っている。彼らは、この世のあらゆる要素を支配しつつある激しさを見て取り、重大かつ決定的な何かが起ころうとしている-世界が途方もない危機の瀬戸際にあることを悟っている。

天使たちは今、争乱の風が、世界が迫り来る破滅について警告を受けるまでは吹かないよう、それを抑えている。しかし、嵐は募りつつあり、今にも地上に襲いかかろうとしている。そして、神が天使たちに風を解き放てと命じるとき、筆に尽くせないほどの争乱の光景が現れるだろう。

これらの事柄について正しい見解を示すのは、聖書、ただ聖書のみである。ここには、私たちの世界の歴史における偉大な終末の場面が啓示されている。これらの出来事はすでに前兆の影を落としており、その近づく響きは大地を震わせ、人々の心は恐れのみならず弱り果てている。教育、179、180。

ルカによる福音書21章でイエスは、ミラー派運動の幕開けを告げる「しるし」を挙げられ、ホワイト夫人によれば、それらはすべて成就した。リスボン地震、暗黒日、星の落下、そして東方問題によって生じた恐怖のうちにイスラムによって成就された地上の勢力の揺り動かしを表していた諸国民の苦難は、いずれも成就した。ミラー派の「しるし」にはまた、雲を伴って来られる人の子も含まれており、これはキリストが与えられた「しるし」の順序どおりに成就した。というのは、1840年にオスマンの覇権が抑制されて諸国民の苦難が終わった後、1844年10月22日にキリストは至聖所に来られ、その際、雲を伴って来られたからである。

「また見よ、人の子のような者が天の雲に乗って来て、日の老いたる者のもとに行き、その前に導かれた。彼に主権と栄光と国が与えられ、すべての民、諸国、諸言語の者が彼に仕える。彼の主権は永遠の主権であって、過ぎ去ることがない。」ダニエル書7章13、14節。ここで述べられているキリストの来臨は、地上への再臨ではない。彼は、支配と栄光と御国を受けるために、天において日の老いたる者のもとに行かれるが、それは彼が仲保者としての働きを終える時に彼に与えられるものである。1844年、2300日の終わりに起こると預言されていたのは、地上への再臨ではなく、この来臨であった。天の御使いたちに伴われて、私たちの大祭司は至聖所に入り、神の御前に現れて、人類のためのご自身の奉仕の最終の働きに従事される。すなわち、調査審判の業を行い、その恩恵にあずかる資格があると示されたすべての者のために贖いをなすためである。『大争闘』479ページ。

ミラー派の歴史に伴う「しるし」は、十四万四千人の歴史に伴う「しるし」の型を成していた。キリストがたとえ話によってこの歴史叙述に第二の証しを与えられたとき、主は弟子たちに「春に芽吹く木々」を指し示された。主は、木々が芽吹き始めるとき、あなたがたは世の終わりが近いことを知るのだと彼らに告げ、また、春に芽吹く木々を目撃す

る世代は、主の再臨の炎の中で天と地が過ぎ去るのを見るまで生きるのだとも教えられた。

それらが今芽吹くと、あなたがたは自分で見て、夏がもう間近だと知る。同じように、これらのことが起こるのを見たなら、神の国が近づいていると知りなさい。まことにあなたがたに言う。すべてが成就するまで、この世代は過ぎ去らない。天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。ルカ 21:30-33.

では問題は、「木々がいつ芽吹き始めたのか」ということになる。後の雨は2001年9月11日に降り出したが、イザヤによれば、それは神の「東風の日の荒い風」の「その日」である。

定められた分に応じて、それが伸び出すとき、あなたはそれと論じ合う。東風の日に、彼はその荒々しい風をとどめる。これによってヤコブの不義は清められ、これが彼の罪を取り除くすべての実である。彼が祭壇のすべての石を、打ち砕かれた白亜の石のようにするとき、木立や像はもはや立たない。だが、守りの堅い町は荒れすたれ、住まいは見捨てられ、荒れ野のように残される。そこでは子牛が草を食み、そこで伏して、その枝を食い尽くす。その枝が枯れると、折り取られ、女たちがやって来て、それに火をつける。彼らは悟りのない民だからである。それゆえ、彼らを造った方は彼らをあわれまず、彼らを形づくった方は彼らに恵みを示されない。その日には、主は大河の水路からエジプトの流れに至るまで打ち落とし、イスラエルの子らよ、あなたがたは一人ひとり集められる。その日には、大いなる角笛が吹き鳴らされ、アッシリアの地で滅びかけていた者たちと、エジプトの地で追われていた者たちが来て、エルサレムの聖なる山で主を礼拝する。イザヤ書 27:8-13

後の雨は2001年9月11日に（量り分けられて）降り始め、後の雨のメッセージと偽の「平和と安全」のメッセージをめぐる論争が始まった。その論争の歴史こそ、ヤコブの不義が取り除かれる（清められる、すなわち贖われる）ところである。その論争の歴史、すなわちハバククの論争は、十四万四千人が封印される期間であり、最終的に、ラオデキアのセブンスデー・アドベンチストが主の口から吐き出されることで締めくくられる。というのも、それは「防備された都」でありながら荒れ果てることになり、悟りのない民の都となってしまう、憐れみも恵みも見いだせないからである。その時、黙示録十八章の「第二の声」が大いなるラッパを吹き鳴らす。これは第七のラッパであり、第三の災いである。そして、神のほかの羊の群れが「エルサレム」に来て礼拝する。そこは勝利の教会の運動となっている。

2001年9月11日は、地球の歴史の最後の世代が到来したことを示しており、春の木々の芽吹きを見分ける者だけが、その芽吹きをもたらしている雨を受ける。第三のわざわいにおけるイスラムこそが、後の雨の到来と十四万四千人の封印を示すしるしであると認識する者だけが、その群れに加わるだろう。

「自分に与えられている光に従って生きている者だけが、さらに大いなる光を受ける。もし私たちが、キリスト教の徳を積極的に実践することにおいて日々前進していなければ、後の雨における聖霊の顕現を認識できない。私たちの周囲の人々の心にそれが降り注いでいるかもしれないが、私たちはそれを見分けることも受けることもできない。」『牧師への証言』507.

私たちは後の雨を待ってはいはならない。私たちに降りかかる恵みの露と雨を認め、受け取ろうとするすべての者の上に、それは臨むのである。私たちが光のかけらを拾い集め、私たちが神を信頼することを喜ばれる神の確かなあわれみをありがたく受けとめるとき、すべての約束は成就する。「地が芽を吹き出し、園がその中に蒔かれたものを芽生えさせるように、主なる神は義と賛美をすべての国々の前に芽生えさせる」(イザヤ 61:11)。全地は神の栄光で満たされる。セブンスデー・アドベンチスト聖書注解 第7巻、984ページ。

次回の記事で研究を続けます。

「助けることのできる者たちが自らの務めに目覚めて奮い立たないなら、第三の天使の大いなる叫びが聞かれるとき、彼らは主の働きを認めないであろう。地を照らすための光が発せられるとき、主を助けるために立ち上がる代わりに、彼らは自分たちの狭い考えに合わせるために主の働きを縛り付けようとするであろう。言うておくが、この最後の働きにおいて主は、常の秩序から大いに外れた方法で、また人間のいかなる計画にも反するやり方で働かれる。私たちの中には、世界に与えられるべきメッセージにおいて第三の天使に加わる天使の導きのもとで働きが前進するときでさえ、主の働きを常に支配し、どのような動きがなされるべきかまで指図したがる者がいるであろう。主は、ご自身がみずから手綱を握っておられることが明らかになるような方法と手段を用いられるであろう。働き人たちは、義の働きをもたらすそれを完全にするために主が用いられる単純な手段に驚かされるであろう。」『教職者への証言』300ページ